

第57回日本顎口腔機能学会学術大会 学術企画シンポジウム
価値・質の高い「ヒトを対象とした研究」を行うために
～臨床現場・大学における 若手研究者と指導者の視点を考える～

【企画趣旨】

ヒトを対象とした研究は、大学や臨床現場で広く行われており、診断や治療技術の進歩に貢献している。本学会に所属する多くの若手研究者も、ヒトを対象とした研究を行っている。そして、ヒトを対象とするが故の困難さとも直面し、その度に先行研究を探しては、前進へのヒントを得てきたのではないだろうか。

研究の難しさをどのように乗り越え、価値・質の高い研究を行うか、そのヒントは、やはり『価値・質の高い研究論文』にあると考えた。そこで、今回のシンポジウムでは、「臨床」および「大学」の現場で研究を続けるシンポジスト達が、それぞれの現場で行われた先行研究のうち、「価値・質が高い」と考えた論文を取り上げ、筆頭著者および指導者と直接対談をすることで、論文だけでは窺い知れない「質・価値の高い研究を行う」為に必要な視点を明らかにする。

【講演内容】

「臨床現場において、いかに客観的で正確なヒトのデータを採取するか」

神田知佳（聖隷横浜病院）

共同演者：高木大輔先生（聖隷三方原病院）／藤島一郎先生（浜松市リハビリテーション病院）

患者が示す症状の解明や、診断技法、治療法の開発等、臨床現場には研究のシードがたくさん転がっている。一方で背景の異なる患者を対象とするため、バイアスが混入しやすい。このような臨床の現場で可能な限りバイアスを減らし、正確で客観的なデータ採取を実現した研究は、価値が高いと考えられる。高木大輔先生、藤島一郎先生が発表された「嚥下評価時の咽頭残留と握力・舌圧の関連」はこのような点を追究した研究である。この論文を軸にして対談を行い、臨床現場で「質・価値の高い研究」を行うための秘訣を明らかにする。

「大学という研究機関を生かすには」

辻阪亮子（大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座クラウンブリッジ補綴学教室）

共同演者：高岡亮太（同上）

ヒトがヒトのことを研究するということは技術的・時間的・経済的・倫理的など様々な制限があり、決して安易に出来るものではない。しかしながら、ヒトが対象となっている疾患に関する研究は最終的にはヒトで証明されなければ信頼性に欠けてしまう。

本研究の演題では、睡眠時ブラキシズムの原因の一つとされる遺伝要因・環境要因の重要性を双生児研究という手法により解析された高岡先生に、「大学」という組織機関を生かし、ヒト対象研究における「質・価値ある研究」を行うために、上記のような制限を回避できるヒントをいただく。

総合討論コーディネーター：斉藤 小夏（明海大学）

今回のシンポジストはヒトを対象とした研究に携わっているという共通点があり、臨床現場あるいは大学で研究を行うという相違点があった。しかし目指すものは「価値・質の高い研究」である。

両者の立場を生かした研究とは何か、別の立場にどのように生かすか、会場を交えて総合討論を繰り広げていく。このシンポジウムを通し、若手研究者の視野を広げる一助となることを期待する。